

# 日本人大学生の文化的気付きに関する基礎的研究

## 塩 入 す み

### 1. 研究の背景と目的

従来異文化経験による意識変化の研究は、留学による意識変化を扱った研究が主流であった。たとえば、英国大学生の短期留学経験と職業観 (Alred & Byram,2002)、日本人留学生のソーシャル・スキル (田中, 2000; 高濱・田中, 2000)、日本人留学生のアイデンティティ変容 (末弘, 2006) などである。従来の研究の中心は「意識」「意識変化」といった心理学における自己意識の調査であったが、本研究が重視するのは「どうしたら変わるか」という教育実践の側面からの考察と、とくに異文化経験による意識変化の核となる「文化的気付き」(cultural awareness)の解明である。

筆者はこれまで留学生の異文化経験に関する質的研究において、日本人大学生が異文化の価値観に触れる過程について考察を行い、次のような課題が残っていた。

(1) 異文化経験を研究対象とする立場からは、個人の心理的变化をもたらす要因の中で「文化的気付き」に絞って考察する必要がある。

(2) 意識の変化に関する効果を知るためには在学中の継続した調査が必要である。

(3) 授業外、大学外での異文化経験や大学入学前の異文化経験は、入学後の外国語学習や国際交流活動等に対する姿勢やアイデンティティの形成にも影響しており、そのプロセスについても明らかにする必要がある。

(4) 体験型学習や教材の効果を評価・測定する方法は、量的な方法と質的な方法の両方向で確立していく必要がある。

これらの問題のうち本稿はとくに (1) (3) を考察し、以下の2つを目的とする。

- ① 異文化経験を通じて大学生の意識変化をもたらす教育実践を開発する。とくに「文化的気付き」とは何かを明らかにする。
- ② 大学生個人を取り巻く学内外の環境や社会との関わり、大学入学前の異文化経験は、個人のその後の進路やアイデンティティの確立にどう影響しているかを明らかにする。

## 2. 理論的枠組み

### 2.1 文化的気付きと異文化対処力

文化的気付きに関する定義や実践方法は、異文化間教育法である「異文化対処力育成のためのモデル」(山岸・岩下・渡辺, 1992)及び構成主義に基づく教育実習法「文化的気付き(cultural awareness)による方法」(渡辺, 2002)を参考にしている。「異文化対処力育成のためのモデル」は、異文化対処能力を構成する能力として、通常の仕事に必要な能力である「状況調整力」、異文化に対処する際に必要な「文化的気付き」「自己調整能力」「感受性」を設定し、統合的に異文化接触における資質を捉えようとしたものである。異文化接触における問題に対処するためには、まずは自らの無意識の前提に気付くこと(awareness)、次に相手と調整する能力が重要になる。文化的気付きによる方法は、自文化と対照的な価値観をもつ文化と対峙し、比較によって自らの文化的前提となる価値観に気付くことにより、異文化接触で生じる多様な問題への対処を可能にするという方法である(渡辺, 2002)。

### 2.2 文化的気付きと状況的学習論

学習者の自己成長に関する理論として参考にしたのは「状況的学習論」(Situated Learning Theory)である。状況的学習論は学習をコミュニケーションや道具などにより構造化された「分散知」(Distributed Intelligence)のシステムと協調関係を構築していく過程とみる(西口, 1999)。すなわち、学習を個人の知識の蓄積や自己成長といった個人の内的変化ではなく、全人格の変化であると考ええる。たとえば、外国語がうまくなるということは単なる学習者の知識や技能の向上ではなく、行動や価値観など人格的・総合的な変化であり、いわば「外国語ができるわたし」になることであると捉える。

また、状況的学習論と文化的気付きの接点として注目されるのは、Tomlinson & Matsuhara (2004)による「経験と文化」に関する指摘である。それによれば、文化的気付きは内的かつ動的であり経験により変化し、多次元的で直接的あるいは間接的に文化を経験することにより得られる(和泉元, 2013)。

状況的学習論は学習という個人の成長をコミュニティという社会に関連付け、個人の成長がマイクロなコミュニティからマクロな社会に発展する可能性を示すものである。

### 2.3 文化的気付きと授業モデル

塩入(2015b)では上述の理論を背景としてKolb(1984)(2008)のような構成主義的な学習モデルと状況的学習論を統合した「多様性志向のコミュニティ形成のための学習モデル」を提案した。このモデルの特徴は以下のとおりである。

(1) 【教育実践の段階】は【思考の段階】と連動している。

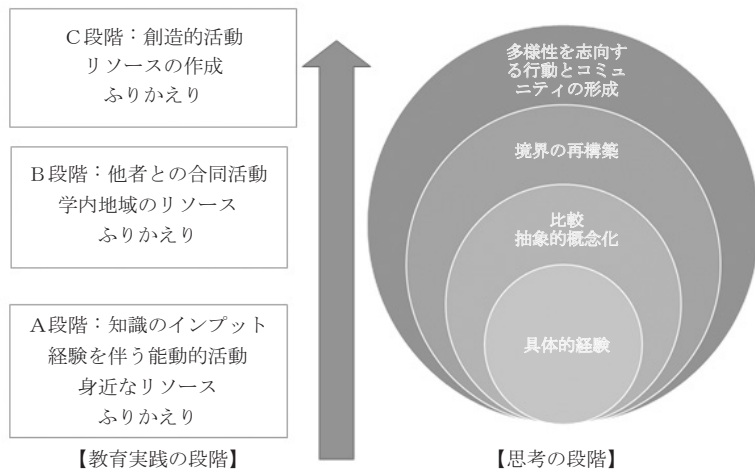


図1 多様性志向のコミュニティ形成のための学習モデル

塩入 (2015b) を修正

(2) 【思考の段階】は具体的行動から最終的には行動を伴うものになっていくが、いずれの段階においても教育実践における文化的気付きとふりかえりが必要である。

(2) 文化的気付きは他者との相互作用により促進される。【思考の段階】が高次の段階に進むにつれ、自らの関わるコミュニティが再構築されながら形成される。

(3) 【教育実践の段階】の活動やリソースはA～C段階へと発展する。まず初期のA段階では、具体的な個人的経験を促す身近なリソース（学内の留学生との接触の機会等）による知識のインプットがなされる。次にB段階では、校内や地域のリソース（学内・地域の国際交流活動・ボランティアへの参加等）による外国人等との共同活動が考えられる。最後にC段階では、学習者自らが自主的に多様性志向のコミュニティを学内外に形成し、自ら多様性を志向するリソースを創造的に生み出していく。

塩入 (2015b) では主にA段階の活動を中心に実践を試みたが、今回はB～C段階の教育実践として日本人学生主導による留学生との合同授業を試みることにする。

## 2.4 文化的気付きとアイデンティティ確立

次に、文化的気付きと個人の自己成長との関わりに関する研究を見ていく。アイデンティティの確立期といわれる青年期及び成人初期における異文化経験は、その後の人間形成や職業選択などに少なからぬ影響を与える可能性をもっている。

Rosenthal (1987)・溝上 (2004) は青年期のアイデンティティを測るためには過程志向のアプローチが必要であるとしているが、本研究も異文化経験を自己成長といった発達の側面から捉えるためには過程志向のアプローチが有効であると考えられる。さらに、

理論的な立場として Erikson (1968) の心理社会的アイデンティティ論・箕浦 (2003) の構築主義的な文化心理学や Carspecken (1996) の批判教育学の理論及び研究方法を参考にしている。

Erikson (1968) においてアイデンティティは、社会的関係の中で危機感 (crisis) と同一化により達成される包括的な自己意識である (Breakwell, 1986) が、この概念をさらに具体的に発展させた Newman & Newman (1991) は、アイデンティティの構成要素を「内容」(content)と「評価」(evaluation)に分け、「内容」には「私的な自己」(理想、目標、個人的特徴)と「公開された自己」(社会的役割、他者の期待)があり、「評価」はそれらの内容に対する価値の付与であるとする。

これらのアイデンティティに関する概念に加え、本研究では2つの社会・文化の階層「大学内での人間関係」「青少年文化」とアイデンティティとの関わりをとらえたい。文化心理学や批判教育学の理論はいずれもミクロな視点とマクロなレベルを結合させる試みを提出しているが、先に引用した状況的学習論のような立場も個人の学習を社会的な組織と関連付けるアプローチであり、異文化経験という文化を含む個人的経験を扱う領域において心理と社会を結び付けることが有効であると考えられる。

以上のような理論を背景として、以下では、まず2.5で本学外国語学部で行った基礎的な調査について述べた後、3.で合同授業の実践、4.で個別の事例研究について述べることにする。

## 2.5 基礎データ「異文化交流に関するアンケート調査」

### 2.5.1 調査の目的と方法

本学外国語学部での実践と事例研究を始めるにあたり、学生たちの異文化経験に関わる基礎的なデータを得るために、外国語学部1、2年生を対象としてアンケート調査を行った。具体的な経験を知るためにアンケートは記述式で行い、回答の内容によっては個別に継続調査をするために記名式とした。質問項目は以下のとおりである。

#### 資料1 異文化交流についてのアンケート質問項目

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>I. なぜ外国語学部に入ろうと思いましたか。</li> <li>II. 今まで海外の人と交流した経験を教えてください。</li> <li>III. その時に印象深かったことは何ですか。</li> <li>IV. 現在何か国際交流の活動はしていますか。</li> <li>V. 在学中にどんな活動をしたいですか。(留学 etc...)</li> <li>VI. 卒業してからどんな仕事をしたいですか。</li> </ul> |
|---|

アンケート調査は2015年11月11日に30分程度で実施した。調査協力者は、英米学科1年生46名(女子36名、男子10名)、東アジア学科1年生17名(女子16名、男子1名)、英米学科2年生12名(女子7名、男子5名)の計75名であった。

## 2.5.2 調査の結果と分析

以下、項目ごとに調査の結果を表1にまとめ、結果を考察する。

表1 異文化交流についてのアンケート結果

(人：複数回答可)

質問	所属学科・学年 性別		英米1年		東アジア1年		英米2年	
	女子 36	男子 10	女子 16	男子 1	女子 12	男子 5		
<b>I 入学動機</b>								
外国の言語文化が好き、興味がある	22	6	12	1	6	1		
将来の仕事に活かしたい	12	2	2	0	0	4		
教員免許を取得したい	5	3	3	0	1	0		
その他								
<b>II 異文化交流</b>								
高校・大学の留学生との交流	21	2	1	1	0	0		
小中高の国際交流活動・留学	7	5	7	0	0	1		
高校のALTの先生との交流	6	0	2	0	2	0		
語学学校	4	0	0	0	1	0		
家族旅行	2	0	7	0	0	0		
身近に外国人がいた	0	1	6	0	1	0		
その他	4	2	1	0	0	0		
<b>III 異文化交流で印象深いこと</b>								
語学力・ことばに関して	21	5	5	0	2	2		
態度・コミュニケーションに関して	10	0	6	1	1	0		
文化・社会に関して	8	2	3	0	1	1		
<b>IV 国際交流活動</b>								
大学の留学生のチューター	11	0	2	1	0	0		
大学の国際交流の係など	2	0	0	0	0	0		
地域などのボランティア	2	0	0	0	0	0		
海外の知人とメール交換など	2	1	1	0	0	0		
<b>V これからしたい活動</b>								
留学・海外研修・海外実習	33	7	12	1	4	0		
海外旅行	4	5	1	0	0	0		
ボランティア・資格取得	6	0	1	0	0	0		
留学生などとの交流	4	1	3	0	0	0		
研究・学習	2	1	1	0	1	0		
<b>VI 卒業後の仕事</b>								
外国語を使う・国際交流関係	16	6	7	1	5	0		
旅行・航空・ホテル	11	2	4	0	1	0		
教育(外国語教育・日本語教育)	5	3	2	0	0	0		
その他	6	1	0	0	3	0		

### 【I 入学動機】

入学の動機は「英語が好き」「英語・韓国語がうまくなりたい」「将来の夢のため」といった英語への興味や学習意欲、進路との関わりに関する回答が多かった。過去の異文化経験が志望の動機となる例はほとんどなく、「外国人とコミュニケーションが取れるようになりたい」という回答からすると、調査対象である1, 2年生の大半はこれまで大きな影響のある異文化経験はしていないと考えられる。

## 【Ⅱ 異文化交流】

これまでの異文化交流の経験で顕著であったのは、高校や大学での留学生との交流や学校での国際交流活動に参加した経験である。学生たちにとって異文化経験は個人の生活範囲では少なく、学校の教育活動が大きな役割を果たしていることがわかる。また、専攻となる学科によりやや違いがみられ、東アジア学科の学生の場合は身近で中国人や韓国人と接触した機会が比較的多いことがわかる。

## 【Ⅲ 異文化交流で印象深いこと】

ことばに関するものが大半を占めた。「修学旅行で思ってもないことが起こると訳がわからなくなって英語が全く出てこなくてまだまだだと思った」「自分の英語力、コミュニケーション力の無さを実感させられた。自分の英語が通じて相手の言っていることがわかり会話が成り立ったときのうれしさ」など自分の外国語能力に関するものや、「海外の人は日本語がうまい。堂々としゃべっている」など相手の日本語能力に関するものが多かった。

## 【Ⅳ 国際交流活動】

現在している国際交流活動は、学内の留学生のチューターをしているという回答が多かったが、全体に活動に参加している学生が少ない傾向にある。個人的に SNS で外国人と話をしているという回答は少数見られたが、予想より少なく、外国語学部の学生でも積極的に国際交流活動に関わっている学生は多くなかった。

## 【Ⅴ これからしたい活動】

圧倒的に多かったのは留学で、在学中の交換留学、海外研修、海外実習を希望する学生がほとんどであった。一方、海外旅行、ボランティア、留学生との交流などとは大きく数字が離れていることから、大学のプログラムとしての国際交流活動に期待する傾向が強いと言えるだろう。

## 【Ⅵ 卒業後の仕事】

1年生がほとんどであるためか、漠然と「外国語を使う仕事」のような回答も多く、次いで旅行・航空関係、ホテル、教育に関する仕事が挙げられた。外国語と関わらない仕事を挙げた者が1年生では皆無であったことから、入学の動機として将来の職業選択に関わっていると言えるだろう。2年生では公務員を挙げる回答も見られた。

以上の調査結果の考察をまとめると、本学外国語学部の1年生の傾向として以下のような点が指摘できる。

- ① 入学動機として留学や外国語に関わる職業への志向が強い。
- ② 入学前までの異文化経験は高校など学校の国際交流プログラムによるものが多く、その際に受けた外国語や日本語に関する印象が深く残っている。
- ③ 学外の個人的な国際交流活動には比較的消極的であるが、留学に対してはほとんどの学生が希望している。

これらの傾向から、大学においてキャリア教育に結び付くような教育実践や国際交流の機会を提供していくことが重要であると考えられる。このアンケート調査の結果を踏まえて教育実践と事例調査を行うこととした。

### 3. 留学生との合同授業の実践

#### 3.1 実践の手順

1つ目の教育実践として「留学生との合同授業の教材作成と実践」を①～④のような手順で行った。

##### ① 日米の若者に対するアンケート調査の実施

アメリカの高校で日本語教育に携わった経験のある本学外国語学部の卒業生銚之原秀平氏に依頼し、アメリカの高校及び本学において男女共同参画に関する同一内容のアンケート調査を実施し、比較、分析する。

##### ② 日本人学生による男女共同参画をテーマとした授業の計画と教材の作成

本学外国語学部日本語教員養成課程履修生約20名により、本学の交換留学生対象科目「日本文化演習」での授業を計画し、教材を作成する。

##### ③ 留学生との合同授業の実施

本学留学生対象科目「日本文化演習」のクラスにおいて上記の卒業生と日本語教員養成課程履修生によりアンケート調査の結果及び作成した教材を導入し、留学生と日本人学生による合同授業を実施する。

##### ④ 卒業生と日本語教員養成課程履修生によるふりかえり

授業終了後に卒業生と日本語教員養成課程履修生、筆者によるふりかえりを行う。

#### 3.2 教材の作成

##### 3.2.1 仕事に対する考え方の日米比較

教材として2種類の教材を用意した。1つは銚之原氏による上記のアンケート調査「仕事に対する考え方の日米比較」をまとめたデータとしての教材である。アンケート調査の結果、以下のおおよそ①～④のような傾向にあることがわかった。以下の結果と考察は銚之原氏による。

##### 【アンケートの結果と考察】

まず、日本人男子よりもアメリカ人男子の方が仕事に関して経済性を重視し、また、働くことは社会の役に立つものだと考えていた。この原因を推察すると、アメリカでは18歳になると親元を離れる風潮があり、学生であっても生活の自立を求められるため、経済性を重視すると考えられる。また、アメリカでは学生のボランティア活動が盛んであり、大学入学の選考では社会的活動も重要な評価の対象となるため、職業

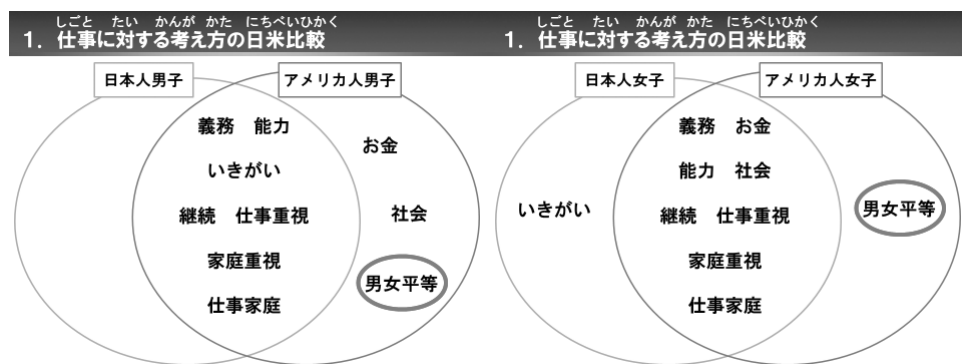


図2 仕事に対する考え方の日米比較(男)

図3 仕事に対する考え方の日米比較(女)

いずれも鉦之原氏による

観に社会貢献が強く関わっていると考えられる。

次に、アメリカ人女子より日本人女子の方が仕事を生きがいとみなす傾向が強かった。これは日本における近年の女性の社会進出の現れだと言える。以前に比べ女性の社会進出が進み、キャリア形成を求める女性が増加した背景が影響していると考えられる。

そして、男女を問わず日本人よりアメリカ人の方が男女平等を重視する傾向が強いことが示された。この結果から、男女共同参画を促進する姿勢は、アメリカ人の方が積極性があると言える。近年日本においても女性の社会進出が進んでいるとはいえ、いまだに残るジェンダーへの画一的な考え方が男女共同参画を妨げる要因となっているのではないだろうか。以上の結果と分析を授業用にまとめた(図2)。

### 3.2.2 ジェンダーをテーマとした教材

次に、上述の調査の結果を参考にしながら、日本語教員養成課程を履修する外国語学部3、4年生17名により、男女共同参画、あるいはジェンダーをテーマとした留学生向けの5つの教材を作成した。それぞれの教材と授業の概要は以下の通りである。

#### 【① 男性の子育て】

まず、デジタルテレビ TOKYO MX による映像資料により東京都内の男性の育児休業取得率の増加、父親のためのファザーリング・スクールを紹介する。次に、youtube による映像資料で昭和時代の家庭内の風景から、父親・母親が家族の中で果たしていた役割を話し合う。最後に、2つの教材を比較した後、各国における男性の育児、夫の家庭における役割について比較・討論する。

#### 【② 同性婚】

同性愛・同性婚に関する3つのデータ；「同性愛許容度の国際比較」「年齢層別の同性愛への寛容度」「同性婚、パートナーシップが認められる国々」(いずれもインター



ネットより)を読み解き、近年日本で法的に話題となっている同性婚について各国の状況と比較して考える。

### 【③ 女性の労働環境・結婚観】

新聞記事「資生堂の働き方改革に賛否 子育て社員『時短』でも遅番」(朝日新聞デジタル 2015年12月7日)を教材として、女性の労働環境や社会進出、それに伴う問題について討論する。記事を読む前に自分自身の仕事観や自国での女性の就労問題について話し、次に記事を読み問題を解き、最後に今後女性が社会でより活躍するためにはどうすればよいか、また結婚観なども混ぜながら討論を行う。

### 【④ 家庭での男女の役割】

アニメ『サザエさん 男の日曜大工』とインターネットの資料「固定的性別役割分担意識<国際比較>」(内閣府平成19年8月調査)を教材として日本の昭和から今に至る男女の役割分担意識を知り、各国との違いなどについて討論する。

### 【⑤ 職場におけるジェンダー役割】

テレビドラマ『ホタルノヒカリ』を教材として日本の職場で求められている理想の女性像について考え、各国の状況と比較しながら自分の理想の女性像を述べる。

## 3.3 留学生との合同授業の成果と課題

### 3.3.1 合同授業の実施

留学生との合同授業の日程と参加者<sup>1)</sup>は以下のとおりである。

日 時：2015年12月17日(木) 14:40~16:10 「日本文化演習」の授業を利用。

場 所：熊本学園大学 1411 教室

参加者：熊本学園大学日本語教員養成課程卒業生及び学部生 15名(日本人14名・中国人留学生1名)・交換留学生 28名(韓国5名・中国17名・台湾1名・ベトナム1名・カナダ2名・イギリス1名・ドイツ1名)

まず、日本人卒業生が導入として日米の若者に対するアンケート調査の結果を示し、今日のテーマである男女共同参画の意識について話を進めた。次に、ドラマ『ホタルノヒカリ』による教材を作成したグループが、職場における女性の役割をめぐって質問や意見の交換を行った。続けてドラマ『サザエさん』による教材を作成したグループが、家庭におけるジェンダー役割についてのグループ討論を行った。

### 3.3.2 ステレオタイプへの気付き

授業後数日して授業を担当した日本語教員養成課程の学生達で反省会を開き、授業と教材について評価を行ったところ、日本人大学生の多くはテーマの難易度や授業の雰囲気や進行に関することが気になったようであるが、今回の実践の目的からすると、

---

1) 参加者の撮影および授業の記録の公開についてすべての参加者の同意を得ている。

どのような状況で文化的気付きを経験するかという点の方が重要である。

以下では日本人大学生の文化的気付きに関して授業記録を分析した結果を述べる。「ステレオタイプへの気付き」は今回の実践でのもっとも顕著な成果でもあり課題でもある。教材作成者や授業担当者である日本人学生の、自文化・他文化に対するステレオタイプの強さが、実践になると顕著になった。とくに自文化、日本でのジェンダー役割に対する日本人学生の考え方はかなり画一的で、またそれが自覚されていなかった。彼らは留学生とのやりとりを通じて初めて気付いたのである。

まず、卒業生が指摘しているように、日米の若者の考え方の違いについて授業担当者がかかなり誘導的に導入しており、個別の意見を聞く機会が少なく、日米の比較が画一的で単純なものになってしまった。

また、教材の選定と扱い方にも問題があることがわかった。たとえば、教材として使った『サザエさん』はやや古い日本の家庭であり、男女の役割がかかなり固定的に描かれている。授業担当者の用いた「円満な家庭」という表現も、同性婚など新しい家族形態が進む現代においては古く画一的な印象を受ける。日本人学生は現代の家庭との違いより文化による違いの方に目が向いていたが、留学生には「理想の家庭」はあくまでも自分にとっての個人的問題であった。しかしながら、その答えは現代社会の様相を反映したものであった。授業担当者が留学生に理想の家庭を問いかけたとき、留学生の反応は予期せぬものであった(授業記録1)。

#### 授業記録1

(グループで話し合い)

- カナダ1<sup>2)</sup> : (紙に猫とフィギアの絵を描いている)  
 日本2 : あなたの理想の家庭?  
 カナダ1 : そう、子どもがいない家庭。  
 イギリス1 : なんで? 私、子ども好きー。  
 日本2 : でも、猫が要るの?  
 カナダ1 : そうです。猫とフィギア  
 イギリス1 : 子どもは~? かわいい子ども~!  
 カナダ1 : 子どもは要らない。  
 日本2 : ○○さんは兄弟がいる?  
 カナダ1 : 兄弟…  
 日本2 : **Brother and sister.**  
 カナダ1 : ああ! いる。  
 日本2 : 小さいとき兄弟がいない方がよかった?  
 カナダ1 : あの一、姉はよかったけど兄はちょっと…

2) 授業記録では発言者を国籍とその国籍の参加者内で通し番号で記す。「留学生」は複数の学生、「クラス」は日本人も含めたほぼ全体が発言または反応したことを示す。

日本人学生が予期していたのは「自分は結婚してから家庭も仕事も両立したい」「自分も子供がたくさんいる賑やかな家庭がいい」のような回答であった。日本人学生は「(円満な)家庭」はあくまでも男女の夫婦と子どもから構成されることを無意識のうちに想定していた。もし同じ質問を日本人にしても、「結婚したくない」「子どもはほしくない」などという回答は少なくないであろう。

日本人学生は日本と他国の違いを強調して討論したかったのだが、現代ではむしろ年代的な違いの方が大きいのかもしれない。文化的な違いは民族や国家による違いより年代的な違いの方が大きいこともあるという点は、昨年度の討論で留学生が指摘したことである(塩入, 2015a)。その際、日本文化をよく知る留学生から「考え方や価値観の違いは民族や国家より個人的な違いであることも多い」という意見が聞かれた。今回も授業担当者が理想の女性像の違いを民族や国家でやや強引に括ろうとしたところ、留学生たちのソフトな抵抗が起きていた(授業記録2, 下線部)。

#### 授業記録2

日本3：あなたが考える女性や男性の理想像とは？  
 中国1：仕事と家庭は両立できて、そしてセンスもあって、旦那さんにセンスのある服を着させて、家に行くとその家具とかも自分で…そんな感じ。  
 日本3：はい。ありがとうございます。今は、中国の方の、でしたね。では韓国の方いらっしゃいますか。韓国出身の人？  
 韓国1：①私は韓国の代表としてじゃなくて、わたしのこと。そのなんていうか、気が合うっていうか、私と一緒に話したり生活したりする人はわかるんですけど、たぶん難しいと思います。  
 日本3：あ、韓国の方ですか。  
 韓国2：②韓国の理想像は多分家庭的な人で、子育てがよくできる人。男に従う人(笑)。  
 日本3：あ、では、日本の女性像はどうですか？日本で求められている…。  
 韓国3：③積極的な女の人。  
 日本3：④積極的な女の人。そ、そう見えますかね。積極的な女の人。では、ちょっと時間がなくなってきたので、3番ですね。『あなたが考える女性や男性の理想像はどんなものですか？』  
 ⑤では、どうですか、理想の男性像は？  
 中国2：金持ちな人。  
 クラス：(笑)  
 日本3：金持ちな人(笑) いいですね。では、もう一人聞いてみますね。  
 中国3：顔がかっこいい人。

授業記録2を見ると、自分は国の代表ではなく個人としての立場を強調したり(下線①)、自分の国、韓国の文化に対するステレオタイプ的な見方をわざと発言したり(下線②)、日本3の予想と全く反対の回答をしている(下線③)。実は韓国3の学生は日本人の女性の友人も多く「日本の女性は積極的だ」というのは彼の本当の気持ちだったのだが、それに対し日本3の授業担当者は反応を示さず、次の質問に移ってしまった(下線④)。すると、もはや留学生たちは「金持ち」「かっこいい」などの一

般論としての表面的な理想を語るのみで、真摯にこの問題を考えることを止めてしまった（下線⑤）。実は、昨年も留学経験の豊富な日本文化をよく知る留学生が、教員の予想するステレオタイプの日本文化論とは反対の意見を出すという状況があったのだが、そのときは授業担当であったベテラン教員が個々の意見を丁寧に受け止め、クラス全体で共有させたため議論が深まったのだった。韓国3の学生が「日本の女性は積極的だ」と言った時こそ、討論を深める絶好の機会だったのではないだろうか。

また、今回の実践でもう1つ重要なのは、日本人学生は教材を作成している段階では自分たちのステレオタイプに誰も気付かず、授業で留学生に教材を提示し、さらに後日授業をふりかえてみて初めて自分のステレオタイプに気付いたということだ。日本人だけでは気付かなかったことに、実際に留学生と接触したことで気付くようになるというのは、まさに文化的気付きの特徴であると言えるだろう。

日本人学生の自文化に対するステレオタイプの思考は、語学教育や異文化理解の科目に関わる教員でもしばしば陥りがちである。おそらく授業担当者は授業をリードしようとする意識が強く、自文化を単純化したり画一的にとらえることを促進する意識が含まれていると考えられる。一般に市販されている日本文化を扱った教材の中には画一的な視点で作られたものも多く、海外でそれを学習した留学生が日本に来てその違いに戸惑うという事例は数多く聞く。異文化との接触において自己のステレオタイプの考えに気付くという劇的な「文化的な気付き」を獲得するためには、自分が当然と考える知識を異文化の他者がうまく理解できないとき、すなわち授業や討論がすんなりと進まないとき、予想外の答えが返ってきたとき、外国人が沈黙してしまうときにこそ、立ち止まって自己の前提をふりかえてみる必要がある。ただし、熟練の教員でない学生たちには自分の力でふりかえることは難しく、教員や友人などの助言を得る必要があることも事実であり、今後の実践では実践のふりかえりに対する支援体制や訓練の機会を充実させていくことも課題となる。

### 3.3.3 文化の動的側面への気付き

もう1つ今回の授業実践で課題となったのは、文化は時代とともに常に変化しているという文化の動的な側面に対する気付きが、授業前の日本人学生に不足していたということである（授業記録3）。

#### 授業記録3

日本4：では、ちょっと発表してもらいたいと思います。サザエさんとあなた国の違いを。

中国6：違いですか。サザエさんの家庭は兄弟がいっぱいいて、中国の場合は一人っ子政策のせいで、今、私たちの世代では、一人っ子が多いので、兄弟がいりません。

日本4：ですね。じゃあ、結婚したらどうですか？

中国6：結婚したら、子どもを、あの、男の子1人と女の子1人。

日本4：はい。2人ほしいそうなので。

上の会話で、授業担当者である日本人4の問い「サザエさんとあなたの国の違い」に対し、中国人6は「一人っ子が多い」という現代の中国の社会状況を反映した回答をしている。では現代の日本はどうだろうか。サザエさんの時代と今とでは日本の家族形態も随分変わっており、大家族から核家族への家族形態の変化や少子化は日本と中国に共通する、時代による変化である。

日本人4は本来日本の家族形態の時代的变化に着目したうえでテーマを設定し、こうした時代の変化について「あなたの国の変化との違い」を聞くべきではなかったか。現代の日本の家族形態に関わる社会問題（独居老人の増加、同性婚、少子化等）についてもインプットを行ってから、家族形態の変化の国による違いや、変化した家族における女性の役割の変化について話し合えば、もう少し議論が深まったのではないだろうか。たとえば、今回準備の段階で別のグループの作成した教材「男性の子育て」では、昭和初期の家族の様子を映す映像と現在の父親の通うファザーリング・スクールを映す映像を比較しながら観るというもので、時代の新旧を比較する場合はこうした変化をとらえた話題や教材が必要であろう。

かつての異文化は国や民族の境界であったが、現在はグローバル化と社会の急速な変化により、地理的・空間的な境界より時間的・時代的な境界の方が溝が大きいのかもかもしれない。自・他文化の動的な側面に気付き、議論するためには、他文化との共時的、単一的な比較だけでなく、それぞれの文化の時代的な変化を通時的に比較し、さらにそれを他文化と共時的に比較するといった複合的な思考のプロセスが必要であると考えられる。

### 3.3.4 テーマの具体性・個別性・批判性

今回予想より意見が出なかった原因として、ドラマのような映像教材を用意したにもかかわらずテーマが具体性に欠けていたことが挙げられるが、これは授業担当者がテーマを分析し学習項目として扱う際に、個別性や批判性が不足していたためであると考えられる。

#### 【テーマの具体性と個別性】

男女共同参画というテーマは、就職や子育てといった面から考えるとほとんどの大学生にはまだ経験がなく議論しにくいのは事実である。今回の授業で扱ったドラマも職場での女性像をテーマとしており、自らの経験に結び付かず意見が出しにくかったのではないだろうか。もっと大学生の身近な経験を語れるようなテーマの切り口、たとえば、ちば県民共生センター(2011)は「デートDV(=交際相手や恋人からの暴力)に関する大学生意識等調査」を行っているが、こうした身近な切り口の話題を設定するのは効果的であろう。授業のふりかえりで日本人学生たちから出た話題には「大学の部活動の部長はなぜ女性ばかりなのか」「アルバイト先での男女の待遇の違い」などが挙げられた。一方、キャリア教育という面から考えると、経験はなくとも将来的

に重要であるからこそ敢えて在学中に教育が必要であるという考え方もあるだろう。その際は討論という授業形式より、企業でのインタビュー活動や調査のようなフィールドワークなど行動を共にするような授業形態が有効であると考えられる。

#### 【テーマの具体性と批判性】

具体性を欠いたもう1つの理由は、質問がオープンでなく誘導的で、多様で批判的な思考に結び付かなかったことである。異文化教育で用いられる手法の1つである「批判的事例」(Critical Incident)は、日常生活での微妙な人間関係を扱い、行動の背後にある発想を理解するもので、オープンエンドのシナリオで自分たちで考えて演じるロールプレイや、外国人が日本人の行動についての疑問を書いた新聞への投書を読み、それについて話し合い返事を書くなどの活動がある(佐野・水落・鈴木, 1995)。今回の授業では、日米のアンケート調査の結果も日本人学生が分析して提示し、ドラマの内容に関するQ&Aも既に答えのあるものが多く、留学生と日本人が批判的に思考する機会が少なかった。批判性の欠如はテーマを具体的に考える機会を奪うのみならず、実践の活動そのものの形式を問い直す。

#### 3.3.5 活動の共同性と自主性

次に、活動の形態に関する重要な課題は、日本人学生が授業者で留学生が授業を受ける人という相互作用の少ない構図を作ってしまったことである。そのために議論の方向が誘導的になり多様な意見が出にくくなっただけでなく、日本人学生の自文化に対するステレオタイプの認識を助長させることにもなった。佐野・水落・鈴木(1995)がDamenの研究から挙げた異文化教育の手法を見直してみると、合同授業の形態として今後効果的であろうと思われるのは以下の3つの手法である。

#### 【地域研究】

ある地域で生活するのに必要な文化情報を分析、教育する方法である。たとえば、留学生が日本で就職する際の男女共同参画に関する情報を日本人と共同で収集・分析するなどの授業が考えられる。

#### 【Critical Incident (批判的事例)】

日常生活の微妙な人間関係を扱い、行動の背後にある考え方を理解するものである。オープンエンドのシナリオでの自主的なロールプレイなどがある。

#### 【Culture Discovery Techniques (文化発見法)】

教師がテーマを与え、それについて学習者がインタビューやアンケート調査、実地見学などをして文化的側面を発見する体験学習である。佐野・水落・鈴木(1995)では日本人が外国人にインタビューするなどの活動が挙げられているが、今回のようにさらに進んだ段階の授業においては、日本人が留学生と共に企業などの見学をしてインタビューするなど、共同で活動することが有効であると考えられる。

以上の3つの手法に共通するのは、いずれの活動も日本人と留学生が共同で行う

ことと、活動を自主的に展開し、結論や解答も自分たちで考え作り出すということである。今回不足していたのはまさにこの共同性と自主性であった。

今回の実践は本研究の目的の1つである「効果的な教育実践のためには何が必要かを明らかにすること」についていくつかの答えを与えてくれた。すなわち、ステレオタイプに対する気付き、テーマの具体性と批判性、そして活動の共同性と自主性である。そして、それらを実現するためには、教育的な支援体制の充実も必要であることがわかった。

外国人留学生との合同授業は不確実な要素が多く、相手の反応も予想しにくい。しかしながら、そうした予測のつかない相互作用に身を置くことこそが異文化経験の価値あるところであり、その非日常性こそが日常の暗黙の前提を覆してくれるのである。今回の日本人大学生による授業も異文化理解の授業としては未熟で不備だらけのものではあったが、外国人と接触した貴重な時間を通じ、結果としてこれまで気付くことのなかった自らの文化的な意識に気付くことができたのであれば、それなりの成果があったと言えるだろう。

## 4. 文化的気付きとアイデンティティ確立 — 学生NとHの事例 —

### 4.1 データの収集と分析の手順

本調査は半構造化インタビューや筆記の記録等によっている。理論的サンプリングにより2名の学生を対象として選んだ。いずれの学生も外国語を専攻とし、他の学生より積極的に国際交流活動に関わろうという姿勢が見られた。

すべてのデータの収集は2015年6月から2015年12月までの間、そのうちインタビューはすべて2015年8月から2015年10月までの間に、本学で1回1時間程度行った。そのうち1人の学生は表1『異文化交流についてのアンケート』を整理する作業に加わった。これはこの学生が高校時代の異文化経験から進路選択に大きな影響を受けていることから、高校時代の記憶の新しい1年生のデータを自己の経験の再考の参考としたものである。また、もう1人の学生は2015年4月より本人の希望で大学の留学生寮に住むこととなり留学生との接触が飛躍的に増加したため、6月から11月にかけて毎月1回留学生との交流について、さらに夏季休暇中の海外での語学研修について本人が文字で記録した。

これらのデータのうちインタビューは録音し、後日文字化、分析した。アンケート調査は本人が整理し、筆者と共に分析し、理想自己・コミュニティ・青年文化の3点についてまとめた。本稿では紙幅の関係により、以下ではNの事例のみ掲載する。

表2 学生の基本資料

記号	学年	性別	所属学部・学科	出身	インタビュー実施日	その他のデータ
N	4	女	外国語学部 東アジア学科	熊本県	2015年8月28日 2015年9月24日	アンケート調査 11月11日実施
H	3	女	外国語学部 英米学科	熊本県	2015年8月3日 2015年10月12日 2015年10月19日	留学生交流記録 6, 7, 8, 9, 10, 11月 夏季語学研修の記録8月

## 4.2 Nの事例 — 社会規範への気付きと理想自己の確立

### 4.2.1 社会規範への気付き

Nは韓国語を専攻する大学4年生で、韓国語を熱心な同級生たちとよく行動を共にし、学内外での韓国関係の国際交流活動にも積極的に参加している。3年生の時に韓国で行われた日本語教育実習で韓国の高校を訪問した際、熱心に韓国の高校生たちと交流し、帰国後も連絡を取り合い交流を続けている。彼女が人一倍高校生との交流にこだわるのは、自分自身も高校の時に韓国人サニーと知り合い少なからず影響を受けたからである。サニーとは高校1年の夏休みにニュージーランドの語学研修で知り合った。Nにとってその語学研修は特別なものになった。Nは高校に入学してすぐ、「周りの目を気にする」(下線①)ようになり、学校の友人関係に馴染めず学校に行かなくなった。「自分がどうしたいかわからなく」なり、「何もしなくない」(下線②)状態が続いた。部屋からも出なくなり家族とも話さなくなったころ、母親がNに内緒でニュージーランドでの英語研修に申し込んだ。母親はNが周囲の目を気にして自分を見失っていることから、「誰も知らないところに行って自分がほんとに何をしたいのかちゃんと見つめ直して」(下線③)来るようよう勧め、また、かねてからNが英語を学びたいと言っていたこともあり、英語圏での語学研修を用意した。

#### インタビュー記録1

(Nは調査協力者・Sは筆者)

N: 小学校ではもともと私積極的にやる性格だったんですけど、中学校入ってからもまあ小学校の時よりは控えめだったんですけど、部活でパートリーダーをしたりとか。

S: 部活は何?

N: 吹奏楽部です。

S: 何やってたの? 楽器。

N: バスクラリネットっていう低音楽器の、クラリネットのちょっと大きいやつ。

S: パートリーダーしてたのね。

N: はい。で、高校に入って、①高校に入って周りの目を気にするようになって

S: 入ってすぐ?



- N: はい。で、小学校からずっと仲のいい友達と中学校までずっといたんですけど、高校になってみんなバラバラになっちゃって、それでまたなんか友達作りを一からするのが、ちょっと苦手意識が出てきちゃって、それで、高校一年生の時にあんまり学校に行かなくなって。家からもあんまり出ないようになっちゃって（中略）でも親は行ってほしいから親からは行きなさいって言われるしっていうので、②自分がどうしたいかわからなくなっちゃって、それで自分の殻に閉じこもっちゃって、何もしたくないっていう状況に入っちゃって、で最終的にはもう部屋からも出なくなっちゃったんですけど。
- S: へえ。コミュニケーションとってたの？お父さんやお母さんと。
- N: それも、最初のうちは話したりとかしてたんですけど、やっぱりもう「行きなさい」しか言われなかったから、自分のきもちがわかってもらえないのと、でも親としては行ってほしいっていうのがあるから、その、なんかいざこざっていうのが、だんだん大きくなっちゃって、親とも最終的にはあんまり話さなくなっちゃって、それで一時お母さんから放置されて、そしたらその夏休みに入ったらいかに、お母さんから、ニュージーランド、なんかその、周りのいろんな人からいろいろ言われちゃうから自分が今何をしたいのかとか、これからどうしていくのかを悩んだりとかわけわかんなくなっちゃってると思うから、とりあえずその③自分のことを誰も知らないところに行って、自分がほんとに何をしたいのかちゃんと見つめ直して、自分でどうするか決めて帰ってきなさいって言われて、（へえ）
- S: お母さん考えたんだね。
- N: で、私に黙って勝手に申し込んで、で、そのニュージーランドは、ただ、私が英語を勉強したいって前から知ってたは知ってたので、親がなんかどこが一番安全かっていうのとかも考えて。
- S: 英語が勉強したいってことは知ってたんだね。
- N: テレビとか結構見てたので、洋画。
- S: 一応その単に外国に行ってるっていうんじゃなく、一応Nさんが潜在的に持ってた趣味とか志向みたいなものを考慮してお母さん決めたんだね。

海外での異文化経験は日本の社会での人間関係や規範もゼロにして自分そのものを見直す環境を与えてくれる。Nの場合は母親がNの志向も考慮しながら機会を与えてくれたことが結果的にはプラスの効果を生んだ。最初はいやいや行ったニュージーランドでは、民族も服装も様々で人の目を気にせず自分が好きならいいという「自由」な空気を感じる（下線①②）とともに、日本では自分が「周りの目を気にしすぎ」ていたが、「そんなに気にしなくていい」のだと思うようになる（下線③）。これまでの自分が自分で作り上げた「日本では……」という規範にとらわれ、自分が何をしたいのかを見失っていたことに思い至る。

## インタビュー記録2

N: 行きたくないって私は言いました。でもなんか申し込んでから、行かないとキャンセル料とか出るって言われて、このまま家にいても何も変わらないって言われて、でとりあえず最初はいいやで、でも実際言ってみたら、そのなんだろう、ニュージーランドって多国籍の人たちいっぱいいるから、だからバスに乗っただけでも白人もいるし黒人もいるし、なんかいろんな国の人がいて、中国人とかもいるし、それが当たり前みたいになってて、なんか服装とかも夏休みだったから向こうは冬だったんですけど、①自分は暑いと思ったら半袖の人もいるし、寒いと思ったら長袖の人もいるし、タンクトップの人もいたりとかサングラスかけてる人いたりとかして、なんかすごい自由だなんていうのを感じて、で、それからそのガイドさんというか、その付いてくれる日本人のマネージャーみたいな人が言ってたんですけど、その人にここの自由でしょって言われて、なんか②周りの目とかファッションとかそういうの気にするのって日本ぐらいだよって言われたのも、結構自分の中ではああそうだっていうのがあって、納得したっていうのがあって、そこからもう…なんていうんだろう、自分がすごい気にしすぎてるんだなあっていうのがすごく実感したというか、わかって、その、向こうの高校生とか、女の子とか、タイツとか結構穴空いてても履くんですよ。(へえ)日本だったらちょっとでも伝染してたりとかちっちゃい穴空いてたりしたらすぐ捨てちゃうけど、向こうの高校生はほんとにいっぱい穴空いてこんなおっきいのとかあっても履いてて(へえ)普通に歩いて、逆にこれどうなったら捨てるんですかって聞いたら、それはまあ自分がはけないって思ったら捨てるんじゃないって言われて、ああなるほどって(笑)。お弁当とかも普通にジップロックとかビニール袋とかにリングまるまる一個入ってたりとか、そんな感じだったから。日本だったらお弁当箱にきれいに詰めてみたいのがあるけど、そういうのも気にしないみたいな、食べればいいっていうか、自分がおいしく食べればいいっていうのがあったので、やっぱり自分、③あたしがずっと日本にしかいたことなく、初めて海外に行ったから、行ったのもあって、そういう影響っていうか、その、周りの目を気にしすぎないっていうのは、すごいニュージーランド行ってから、なんか考え方が変わったっていうか、そんなに気にしなくていいんだなっていうのを思ったんですけど。

1ヶ月の異文化経験はNにとって大きな転機となった。帰国後は「視野をもっと広くしたい」「勉強をもっとしたい」(下線④⑤)と思い、ニュージーランドにいたときに韓国人と仲良くなったことから、韓国語を学べる高校に編入することになった。

## インタビュー記録3

S: ニュージーランドから帰って来てからどうだった? 周りを見た時の感じは。  
N: 自分が今まで見てた世界っていうか、友達とかも中学校のころ仲良くしてた友達としか会ってなかったし。なんだろう。日本、熊本にしかそれまでいたことがなかったので、もっといろんなところに行きたいなと思ったし、なんていうんだろ、④視野をもっと広くしたいなと思って、そう思ったらやっぱりその、今から働くんじゃないくて、いろんなところ、なんか⑤勉強をもっとしたいと思って、それでニュージーランド行ったときに韓国人の子と仲良くなって韓国語に興味が出たので、それで韓国語が勉強できる高校あればそこに行きたいなと思って探したらあったので、そこに親と一緒に。

Nは新しい高校では特進クラスに入り韓国語も学び、在学中に韓国の高校に交換留学もした。卒業後は韓国語を専攻し日本語教師の資格も取りたいと考え、現在の大学を選んだ。Nにとってニュージーランドでの1ヶ月の経験は、日本の社会規範とそれに縛られる自分に気付かせてくれる、自己成長の転機となった。

Nが異文化を経験するなかでとくに「周りの目」すなわち周囲の評価や社会規範を意識しているのは、青年期の特徴とも言えるかもしれないが、彼女自身それに重きを置く、すなわち「価値の付与」をしているからである。かつて塩入(2007)では留学生の個人のアイデンティティ確立の過程を「価値の付与」という点から調査したが、そこでも確認したのは、「異文化においては自分が重視する(価値を付与する)ことを中心に気付きがある」ということである。複数の人が同じ異文化に身を置いても気付くことは十人十色で、それはそれぞれの志向や日常において重視することを反映している。Nは服装を始めとする日常の社会規範に価値を付与しており、その意識が強すぎてストレスにもなっていたが、異文化でそうした規範から解放され、自分自身の規範意識を再考することになった。なお、本稿で省略したが、もう1人の学生Hが価値を付与していたのは円滑な人間関係であった。

異文化経験を通じ個人が自己成長をする場合、すべての分野に均等に変化が生じるわけではなく、まず当該の個人が価値を付与するものを中心に、自己や自文化のふりかえり、さらには自己成長、アイデンティティの確立も促進されるものと考えられる。

#### 4.2.2 理想自己の確立・コミュニティ・青年文化

##### 【理想自己の確立】

Nは大学入学後、専攻の勉強や学内の国際交流活動にも積極的に参加し、総じて充実した大学生活を送っていた。とくに国際交流活動に対してNが繰り返し口にしたのは「日本と韓国を繋ぐ架け橋」(下線⑥⑦)という言葉だった。

##### インタビュー記録4

S: 大学に入ってから変わったことある?韓国語に対する興味とか期待してたものの違いとか。

N: 1年生の時はある程度自分で高校の時に勉強してきたものがあって、1年生の時はまた最初から勉強し直して感じだったので、ああこんなもんなのかなあみたいなのがあって物足りないなあって思ったんですけど、でも2年生になってから本格的な韓国語専攻としての勉強も始まったので、そこからは自分の知らない文法だったり、標準語だけでなく方言とかも教えてもらったので、語学に対する知識の幅が広まったというか、ただ入ってきたときは韓国人とすらすら話すようになればいいなと思ってたぐらいだったんですけど、その、韓国語を語学としてこう捉えて専門的に勉強することができるっていうのがここにきてよかったかなって思うところだし、あとは「話してみよう韓国語」だったり、韓国人との交流する機会もたくさんあったし、⑥日本と韓国を  
ちゃんとなつなぐ架け橋っていうか、そういうのに携われてる実感っていうのも

のがここにきてよかったかなって思うところだし、あとは「話してみよう韓国語」だったり、韓国人との交流する機会もたくさんあったし、⑥日本と韓国をちゃんとつなぐ架け橋っていうか、そういうのに携われてる実感っていうのもあったし、いろいろ行動に移せたっていうことがこの大学に入ってきたので、それはよかったかなって思います。

S: 行動に移せたっていうのは？ちょっともう一回教えて。たとえば。

N: その、「話してみよう韓国語」だったり。

S: あれスピーチコンテストだけ？

N: スピーチコンテストとダンス。韓国人と交流する機会もたくさんあったし。あとは、映画祭。それも韓国とかの映画をもっと日本人に知ってもらおうっていうのが目的でやっているんで、⑦それも懸け橋になれたかなっていうのがあるし、あとはサムラノリ。同好会を自分たちで作って一から始めて。サムルノリって太鼓。韓国の伝統楽器があるんですけど、それを自分たちで同好会作って一から全部始めて。

「架け橋」という言葉にはNの理想とする自己の姿が現れており、職業意識にも反映されている。Nは一般企業への就職を決めたが、将来的にはゲストハウスで働きたい、あるいは自分で作りたいという希望を持っている。

外国と日本を繋ぐ架け橋としての自己の理想の姿は、本来ニュージーランドでの転機を迎える以前の自分の姿—日本だけの規範に縛られた視野の狭い自分—とは正反対の方向にある姿である。Nは高校時代の異文化経験による転機以来、大学入学後も様々な経験を通じ、着実に理想自己を確立しつつあることがわかる。

#### 【理想自己とコミュニティ・青年文化との関わり】

Nの理想自己を「架け橋」という言葉から少し離れた視点からも見てみると、その萌芽は高校時代のエピソードに見られる。当時は「元気」で「派手な」自分でいたいという気持ち(下線⑧⑨)があったが、「周りとは仲良くならない」といけないという気持ちが葛藤していた(下線⑩)。

#### インタビュー記録5

S: 周りの目を気にするっていうのは具体的に当時はどういうことが気になったのかな。

N: なんていうのかな、あの、自分の、こう、したい格好だったりとか、髪型とか、そういうのあるけど、周りがそういう恰好だったりとか髪型とかしてないっていうか。なんていうのか。

S: そのころNさんは自分がしたい格好とかあったわけね。どんな格好？制服？

N: いや制服は。私服とか。⑧結構派手な感じの服を着たいっていうのがあったんですけど。

S: 派手なって？

N: 色が、なんていうんだろ、原色に近いっていうか。

S: スポーティな感じ？

N: そんな感じですかね。

S: 女の子らしい, ロリータっぽい感じ?  
 N: いや, ではなくて, ⑨元気な子, みたいな感じの格好とかいいなあって思ってたんですけど, 周りが結構フリフリのスカートとか, 女の子らしい格好をする子が多かったし。  
 S: Aさんはどんな雑誌見てた? ストリート系っていうの?  
 N: そんな感じです。タンクトップとか, そういう格好がしたかったけど, 周りは女の子らしいワンピースとかフリフリのスカートとか, そんな感じの服。  
 S: 周りっていうのは?  
 N: 高校でちょっと仲良くなりかけた友達。入学して, 土日に遊ぶとか。  
 S: 自分だけ違うって?  
 N: あんまりいなかったです。その中にはいなかったです。  
 S: でもさ, 自分だけ変わってたらいいじゃんと思うけど, いやだったの。  
 N: 今はそう思うんですけど, ⑩その時のそのころの自分としては, 周りと仲良くならないと。

Nは高校1年の時にはうまく人間関係を築けなかったが, ニュージーランドで韓国人と知り合い考え方にも転機を迎えて以来, 海外での語学研修で必ず友人を作っている。

表3 Nが交流のある外国人 (N自身の筆記による)

名前	国籍	性・年	きっかけ	思い出	あなたへの影響
サニー	韓国	女・18	高1 ニュージーランド語学研修	韓国語を教えてくれた。	韓国に関心を持つようになった。
ダミ	韓国	女・22	高1 韓国交換留学	お互いに言葉が通じないとき, 仲良くなろうと日本語の本を使って話してくれた。	日本語教師になりたいと思うきっかけを作った。
ウィン	中国香港	女・22	韓国研修で同じクラス	私に会いに熊本に来てくれた。	共通語がお互いの母国語ではなくても仲良くなれると思った。
ミリ	韓国	女・22	韓国交換留学	韓国から帰った後も連絡してくれた。	伝えようとする気持ちが大事だということを強く感じた。

個人の交友関係以外にも, Nは大学で太鼓のサークルを作ったり, 学外でも海外で活躍する和太鼓アーティストのサポート・チームに参加するなど, 外国人や外国人と関わりの多い日本人, 外国で人気のある日本文化(和太鼓)に関わる人々, というように, 国際的な青年文化をめぐる緩やかなコミュニティを形成している。和太鼓という国際的な青年文化に関わる社会的コミュニティは, Nの理想自己としての「元気な」 「架け橋となる」自分が自己実現するための貴重な舞台なのである。

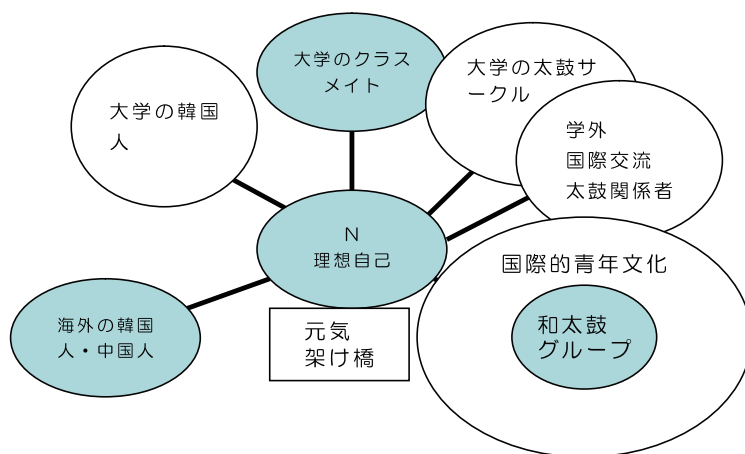


図4 国際交流・青年文化をめぐるNのコミュニティ

### 4.3 文化的気付きとアイデンティティ確立

事例の考察から文化的気付きとアイデンティティ確立に関して以下のようなことが言える。

- ① 異文化経験を通しての文化的気付きは青年期の個人の理想自己形成に影響し、将来的な職業選択にも影響する。文化的気付きは自文化、さらには自分自身に対する気付きでもある。自文化と自分自身を異なる眼でとらえることができたとき、変わろうとする意識の萌芽があれば自己成長に結び付く。異文化経験が自己成長を時には劇的に促進するのは、自文化及び自己を見つめる他者の眼を獲得できるためであろう。
- ② 個人が意識的に国際交流を志向するコミュニティを形成する際、個人が価値を付与する領域を中心にコミュニティが形成され発展する。そうした領域は文化を超えて世代間で共有されていることが多く、青年文化として新たなコミュニティを形成しやすくなっている。

## 5. 結論

今回の実践と調査の結果をまとめると以下ようになる。

### 【教育実践について】

- I. 教材作成等の実践に関わった日本人学生は文化に対するステレオタイプが強く、かつそれを意識していないが、外国人留学生との相互作用の中で初めて文化的気付きが認識される。
- II. 授業での外国人留学生の予期せぬ反応や回答等、一見すると授業が順調に進んで

いない部分にこそ文化的な差異やそれに対する外国人留学生の考え方が含まれていることがあり、授業担当者が留意すべき部分である。

### 【個人のアイデンティティについて】

文化的気付きとアイデンティティ確立に関して以下のような結論が得られた。

- Ⅲ. 異文化経験を通しての文化的気付きは青年期の個人の理想自己形成に影響し、将来的な職業選択にも影響する。文化的気付きは自文化、さらには自分自身に対する気付きでもある。
- Ⅳ. 青年個人が意識的に国際交流を志向するコミュニティを形成する際、個人が価値を付与する青年文化と関わる領域を中心に形成され発展する。

最後に、大学生の自己成長とキャリア意識の効果的な促進に必要な教育的サポートの方向性について、今後の課題と提言を述べたい。

本研究の実践と調査の結果は、学生の自主性に重きを置いた今後の教育実践の方向性を示している。すなわち、熊本の大学における教育実践としての国際交流活動の必要性と、学生の自主性を促すための計画的・段階的な教育実践の必要性である。

国際化の波やメディアの進化は新しい世代に大きく影響を与えているようでいて、実は経験的な知識をもった学生はそれほど多くはないようである。熊本では高校までの国際交流活動は非常に盛んになっているが、あくまでも学校のプログラムが主であり、そのことは逆に学生が大学に入って国際交流を志向する際にも大学のプログラムへの依存が大きいという状況を生んでいる。今後もより一層大学が効果的なプログラムを用意する必要性が高まるだろう。また、そうしたプログラムが効果的な成果を得るためには表面的で単発的な活動に終わらない、継続的、自主的、実践的な活動が必要である。具体的には地域研究やボランティア活動などの活動を日本人大学生と留学生が共同で行い、活動を自主的に展開し、評価やふりかえりも自分たちで行うような活動や、日本人大学生の海外での語学研修に現地の学生との共同活動をより多く組み込むといったことが考えられる。

本研究は文化的気付きを促進するための実践の試みであり、今後は同様の個別データを増やしながらかつ新たな実践を提言していくことになる。

本研究は平成27年度熊本学園大学学術研究助成を受けている。また、九州大学の小山悟先生、熊本県立大学の馬場良二先生より貴重な御助言を賜った。記して感謝する次第である。

## 参 考 文 献

- 和泉元千春(2013) 言語と文化の統合九育実践における文化認識に関する考察:「現代日本論」の授業実践から, *奈良教育大学国文:研究と教育*, 36, pp.101-112.
- 上野直樹(2006) ネットワークとしての状況論, (上野直樹・ソーヤーりえこ編著) *文化と状況的学習 — 実践, 言語, 人工物へのアクセスのデザイン* —, 凡人社, pp.3-39.
- 大学コンソーシアム熊本(2014) 平成25年度大学生および企業従業員に係る男女共同参画意識・実態調査業務報告書.
- 加藤優子(2009) 異文化間能力を育む異文化トレーニングの研究:高等教育における異文化トレーニング実践の問題と改善に関する一考察, *仁愛大学研究紀要(人間学部篇)* 8, pp.13-21.
- 佐野正之・水落一朗・鈴木龍一(1995) *異文化理解のストラテジー*, 大修館書店.
- 塩入すみ(2007) 留学生のアイデンティティ確率の過程 — 台湾人短期留学生の事例から —, *京都橋大学紀要*, 33, pp.113-133.
- 塩入すみ(2008) 短期留学生による実践のコミュニティの組織化, *京都橋大学研究紀要*, 34, pp.61-78.
- 塩入すみ(2011) 日中異文化間コミュニケーション — 異文化で経験する6つの感覚 —, *中国語話者の為の日本語教育研究*, 2, 中国語話者のための日本語教育研究会編, pp.73-78.
- 塩入すみ(2015a) 大学生の男女共同参画意識向上のための効果的な授業実践, 平成26年度大学生及び企業従業員に係る男女共同参画意識・実態調査結果から抽出された課題解決に係る調査研究報告書, 一般法人大学コンソーシアム熊本, pp.69-93.
- 塩入すみ(2015b) 異文化間コミュニケーション能力育成のための学習モデル — 批判的文化認識を中心に —, *海外事情研究*, 43-1, pp.19-39.
- 西口光一(1999) 状況的学習論と新しい日本語教育の実践, *日本語教育*, 100, 東京:日本語教育学会.
- 西口光一(2001) 状況的学習論の視点, 青木直子・尾崎明人・土岐哲編, *日本語教育学を学ぶ人のために*, pp.105-119, 東京:世界思想社.
- 溝上慎一(2004) 大学生の自己形成教育における自己の発現過程 — 同一性の場を差異化する他者, *質的心理学研究*, 3, pp.76-93.
- 箕浦康子(1995) 異文化接触の下でのアイデンティティ — 問題提起にかえて, *異文化間教育*, 9, pp.19-36.
- 箕浦康子(2003) *子供の異文化体験:人格形成過程の心理人類学的研究*(増補改訂版) 東京:新思索社
- 山岸みどり・井下理・渡辺文夫(1992) 「異文化間能力」測定の試み, *現代のエスプリ*, 299, pp.201-214.
- 和栗百恵(2010) 「ふりかえり」と学習 — 大学教育におけるふりかえり支援のために —, *国立教育政策研究所紀要*, 139, pp.85-100.
- 渡辺文夫(2002) *セレクション社会心理学22 異文化と関わる心理学 — グローバリゼーションの時代を生きるために*, サイエンス社.
- Breakwell, G. M. (1986). *Coping with threatened identities*, New York; Methuen.
- Byram, M. (1997). *Teaching and assessing intercultural communicative competence*. Clevedon:



Multilingual Matters.

- Carspecken, P. F. (1996). *Critical Ethnography in Educational Research; A Theoretical and Practical Guide*. N. Y.: Routledge.
- Guilherme, M. (2002). *Critical citizens for an intercultural world: Foreign language education as cultural politics*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: W. W. Norton.
- Kolb, D. A. (1984). *Experiential Learning: Experience as the source of learning and development*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall.
- Kolb, A. Y. and Kolb, D. A. (2008). Experiential Learning Theory: A Dynamic, Holistic Approach to Management Learning, Education and Development. Armstrong, S. J. & Fukami, C. (Eds.) *Handbook of Management Learning, Education and Development*. London: Sage Publications.
- Lave, J. and Wenger, E. (1991). *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, UK; Cambridge Univ. Press. 佐伯胖訳 (1993) 状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—, 産業図書.
- Newman, P. & Newman, B. (2003). *Development through life: A psychosocial approach* (8<sup>th</sup>), Belmont, CA.: Wadsworth/Thomson Learning.
- Rosenthal, D. A. (1987). Ethnic Identity Development in Adolescents, In J. S. Phinney and M. Rotheram (Eds.), *Children's ethnic socialization: Pluralism and development*. Newbury Park, CA: Sage.
- Tomlinson, B. & Matsuhara, H. (2004). Developing cultural awareness. *Modern English Teacher*, 13: 1, pp. 5-11.

## Fundamental research on cultural awareness of Japanese university students

Sumi SHIOIRI

The purpose of this study is to build a basic and practical database for global human resource development by focusing on cultural awareness of university students through a qualitative approach to specific educational practices and individuals. This study is positioned to survey intercultural education experience that may result in changes of consciousness resulting from cross-cultural experiences of Japanese university students.

Research questions of this paper are the following;

1. What are the conscious changes brought to education practices of university students through the cross-cultural experience?
2. How do the internal and external environments and cross-cultural experiences affect the individual students' identities and careers?

The method of investigation is a qualitative observation and interviews.

The following results were observed.

- I. Among the Japanese students who participated, there were very strong cultural stereotypes, something they recognized for the first time in interactions with international students.
- II. Cultural differences and values often account for surprising reactions on the part of the students, so it is important to note and prepare for such reactions within the classroom practice.